

どが密集している。我々は最近腫瘍広範切除後、遊離複合組織移植により良好な手の機能が得られた2例を経験したので報告する。

症例1. 9才, 女児, 左手関節部掌側の淡明細胞肉腫。他院で単純切除された後, 当科で拡大切除術を施行した。切除範囲は遠位手掌皮線から近位へ9×5cmで, 皮膚を含めて軟部組織を一塊として切除した。欠損部は遊離の腱, 神経移植と血管付き広背筋皮弁で補填し, 母指対立筋再建術を加えた。術後8か月の現在つまみ, 握り動作が可能で有用な機能が得られている。

症例2. 27才, 男, 右手背尺側の滑膜肉腫。他院で切除され1か月後に再発し当科に紹介入院。直ちに腫瘍広範切除術を施行した。腫瘍は皮膚を含めて周囲の軟部組織とともに一塊として切除した。再建は遊離の伸筋腱移植と上腕から神経, 血管柄付きの遊離皮弁を採取し欠損部の補填と神経の再建を行った。術後2年2か月の現在手指機能は良好である。

#### 5) 婦人科悪性腫瘍による卵巣摘出に対するホルモン補充療法の骨代謝, 脂質代謝に及ぼす影響の検討

安田 雅弘・倉林 工  
山本 泰明・藤巻 尚  
吉谷 徳夫・児玉 省二 (新潟大学)  
田中 憲一 (産科婦人科)

婦人科悪性腫瘍の治療上, 閉経前症例に卵巣摘出(卵摘)が行われた場合, 卵摘後の低エストロゲン状態による副作用の軽減のためホルモン補充療法(HRT)が施行されるが, その骨代謝, 脂質代謝への効果を検討した。対象をHRT(+)群32例, HRT(-)群8例, 対照群34例にわけ, DXA法によりQDR-1000/Wを用いて腰椎(L2~L4)の骨密度(BMD)を, また血中骨代謝パラメーター, 脂質(リポ蛋白分画)を経時的に測定した。卵摘6ヶ月後の時点では, BMDの変化率はHRT(-)群のみ有意な減少(-4.4%)を認め, 脂質代謝ではHRT(-)群に比し, HRT(+)群のHDLコレステロールは有意に高値で, 動脈硬化指数は有意に低値を示した。卵摘後のHRTは骨量減少の予防効果があり, この効果は骨代謝パラメーターの検討から骨代謝回転亢進の抑制によることが示唆され, またHRTは脂質代謝にも好影響を与えることが示された。長期的なQOLを考慮し, 婦人科悪性腫瘍による卵摘例にHRTは有用であると考えられた。

#### 6) 乳児神経芽腫の治療

大沢 義弘・岩渕 眞  
広田 雅行・松田由紀夫 (新潟大学小児外科)

神経芽腫(本症)は小児の最も多い固形腫瘍であるが, 全体の治療成績は不良である。しかし, 予後は発症年齢により大きく異なり, 乳児期発症例は進行例をも含め比較的良好である。特に, 最近施行された乳児のマスクリーニング(マス)による発症例の治療成績は極めて良好(2年生存率97%)となっている。一方, 少数ではあるが予後不良例も経験される。そこで, これらの事実を踏まえ, 治療に伴う副障害(化学療法死, 手術の後障害, 等)をも考慮しつつ最良の治療成績を上げ得る治療方針が要求される。今回は我々の本症の治療経験をもとに乳児例の治療方針を検討した。

当科で1992年末までに経験した本症乳児例は33例であるが, マス症例は18例(1985年以降)であった。このうち, 死亡は4例で再発生存は2例であった。この死亡, 再発例を提示しつつ進行例を中心に治療方針を述べる。

#### 7) 腹腔鏡下骨盤リンパ節切除術による前立腺癌の臨床病期診断

西山 勉・照沼 正博 (厚生連長岡中央  
総合病院泌尿器科)

〔目的〕前立腺癌患者に対して所属リンパ節転移の有無を確認し, 臨床病期診断を確実にを行うことを目的に腹腔鏡下骨盤リンパ節切除術を行った。〔対象ならびに方法〕リンパ節切除術前の臨床病期診断は病期Aが1例, 病期Bが6例, 病期Cが1例, 病期D2が3例であった。切除範囲は外腸骨血管から内腸骨血管の間の範囲である。〔結果〕リンパ節切除術により11例中2例でリンパ節転移陽性であった。リンパ節切除術後の臨床病期診断は病期Aが1例, 病期Bが5例, 病期Cが1例, 病期D1が1例, 病期D2が3例であった。〔結論〕腹腔鏡下骨盤リンパ節切除術による前立腺癌の所属リンパ節転移の有無の決定は, 現在画像診断では診断に苦慮するリンパ節転移の有無を比較的簡便に診断するため, その後の患者の治療方針を決定するのに非常に有用である。